

## 日本の大学における TOEIC 指導の課題 そのⅡ

### Problems Related to TOEIC Instruction in Japanese Universities Part II

内海 俊祐<sup>\*</sup>

Shunsuke Uchiumi

**前回要旨：**国内の大学で TOEIC の指導が盛んに行われているという現状を踏まえ、どのような理由で日本の大学あるいは企業に TOEIC がかくも人気があるのかということ考察した。

**今回要旨：**TOEIC 指導を行う場合に問題となるいくつかの事柄を指摘し、日本人の英語運用能力の特徴を踏まえたうえで、その向上のために TOEIC を有効利用する方法論を提言として示した。

**Key Words：**TOEIC 英語教育 国際化

#### 2-2 TOEIC と日本人の英語能力

日本の大学の英語教育に浸透し現在ではすでに定着した感のある TOEIC 指導を学生の英語運用能力の確実な向上に資するように行うには、英語科目担当者が学生に TOEIC 受験を単に促すだけでなく、大学組織がカリキュラム上の制度として受験を義務化する必要があるように思われる。受験義務化は個々の大学の存在基盤であるアドミッションポリシーに直接関わる問題であろうが、どのような学生を受け入れどのような人材に育て上げてゆくののかということに関わらず、仮に英語教育を重視する必要がないという風潮が特定の大学のアドミッションポリシーの中に含まれていたとしても、数値化されたデータによる個々の学生の学力の把握および一元管理という点で TOEIC ほど運用上手軽で便利な道具はないがゆえに、制度化は少なくとも大学の自己点検の観点からは有意義である。敷衍すれば、たとえ TOEIC のレベルの英語と全く乖離した英語のレベルの学生がこの試験を受けたとしても、客観的な数値がスコアとして出されるのであるから、たとえ同様のレベルの学生が TOEIC 受験者の大半を占めたとしても、そのデータをもとに英語科目のシラバス内容を勘案する等の改善策につながるのではないかとということである。但し、このこ

とは自己点検が単なる報告書の作成ではなく改革・改善のための活動としてとらえる姿勢がその大学にあることが前提となる。ともあれ、制度化する場合の TOEIC の運用方法を考える場合、大学カリキュラムの単位認定制度を利用して TOEIC のスコアが一定以上の学生に特定の単位を与えることも有効な運用方法ではあろうが、大学が学生全体の英語の能力を一元的に把握し管理するには、TOEIC® 公開テストの受験を全学生に課し、国際ビジネスコミュニケーション協会から受験者のもとに送付される TOEIC の公式認定証のコピーを提出させ、各学生のスコアをデータ化するか、あるいは、団体として大学が IP テストを実施し、スコアロoster (成績一覧表) を管理することが必要となる。後者の方法が日本の大学では一般的であるが、取得したデータは学生各人の学力の評価尺度としても使えるし、学部・学科間あるいは学年間の簡単明瞭な比較や、使いようによっては他の様々な分野の分析のため大変有益な材料ともなる。

以上を踏まえて、あえてここで強調させてもらえば、現在制度化されている TOEIC® 公開テストや IP テストの受験は、リスニングとリーディングの能力を客観的に数値化する目的のためのものであって、スピーキングやライティングの能力の

<sup>\*</sup> 宇部フロンティア大学人間社会学部福祉心理学科教授

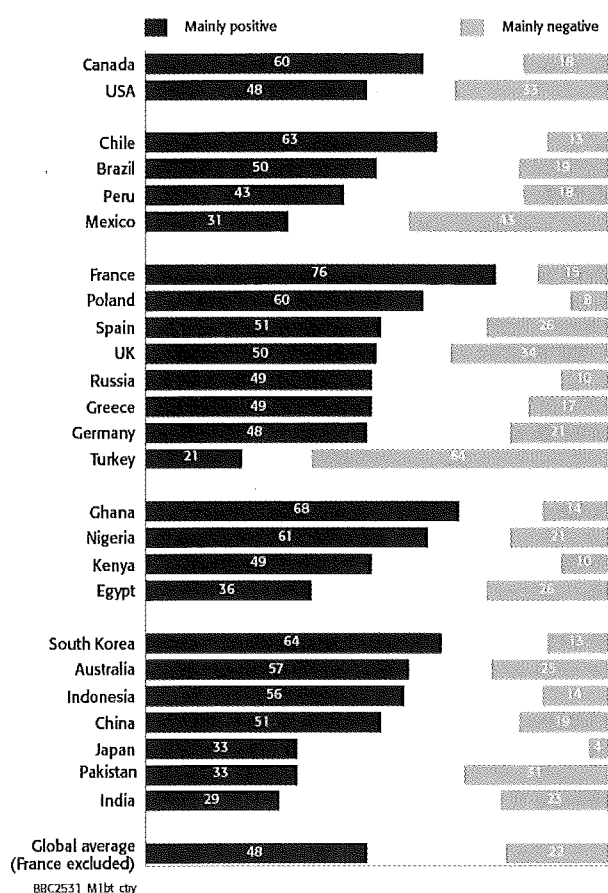
把握は制度の中では想定されていないということ  
を指摘しておきたい。拙稿「日本の大学における  
TOEIC 指導の課題 その I」で既に述べたように、  
リスニングとリーディングの能力を把握するた  
めには別途に TOEIC® SW 公開テストを学生に受験  
させる必要がある。<sup>1)</sup>しかしながら、TOEIC® SW 公  
開テストあるいはその IP テスト版受験を必須に  
している大学は現在のところ日本の大学の中には  
ないと思われる。2014 年度の TOEIC® 公開テスト  
および IP テストの年間受験者延べ数が 2 百 40 万人  
であるのに対して、TOEIC® SW 公開テストおよび  
IP テストの受験者延べ数は 2 万 4 千人であった。<sup>2)</sup>  
100 対 1 の受験者数の対比率を考えると、スピー  
キングやライティングに対するリスニングやリー  
ディングの英語学習上の偏向傾向が顕著に表れて  
いると言える。日本人の英語学習がリスニングや  
リーディングに偏っていることは自明である。

文部科学省の外国語（英語）指導要領解説では、  
英語教育においては「聞く・読む・話す・書く」の  
4 技能を総合的に育成するよう明示されている。<sup>3)</sup>  
それにもかかわらず、教育現場での英語指導の比重  
は明らかにリーディングとリスニングにある。しか  
し、この傾向は少し考えてみれば至極当然のことか  
もしれない。リーディング・リスニング対ライティ  
ング・スピーキングの対照関係は、インプット対ア  
ウトプットの関係であり、インプットが不十分な段  
階でアウトプットを要求することは土台無理な話  
である。しかしながら、この種のアンバランスはあ  
まりにも顕著であり、このことが日本人の英語運用  
能力の特徴を形成する大きな要因になっているよ  
うに思われる。英語による文字や音声の情報を受け  
取りそれを我々の脳が処理する一連の行為である  
リーディングやリスニングの分野では、英語を英語  
のまま情報処理することの重要性がいまだ徹底し  
て浸透してはならず、母語である日本語が英語の理  
解の阻害因子になったままである。明治以来日本人  
は外国語で記された文字情報を正確に美しい日本  
語に翻訳することに傾注してきたし、現在では翻訳  
書年間出版点数は 5, 6 千点に上る。<sup>4)</sup>筆者が学生  
の頃、クラスの中にはシェークスピアのソネットの  
たった一行の訳に酒を飲みながらあれやこれやと  
考えを巡らし一晩を費やすと豪語する強者がいた  
し、大学の授業でも英文和訳に割かれた時間とそ  
のために費やしたエネルギーは甚大なものであつて、  
正確に美しく日本語に訳すことができ褒められた  
ときは決まって自身悦に入つたものである。少なく  
とも筆者が受けた教育では、英語の文章は深く味

わって読むものであり、早く読むことが要求され  
たことはなかったと記憶している。元来、英語と日  
本語はシンタックスが異なるので、英語を日本語に  
正確に美しく和訳しようとするれば、まるで漢文の  
返り点で文の前の部分に戻るような操作を行わざ  
るを得なくなる。そのような読みではなく、チャンク  
ごとに意味を把握し後ろから前には全く戻らず文  
全体を読む指導を学生たちは受けているはずであ  
り、多くの英文を読み込んでゆくうちに各チャンク  
を一つ一つ和訳することが次第に面倒になり、自然  
と訳さずに文を把握できるようになるものであるが、  
そのようなプロセスを完了した学生の数が少なすぎ  
るのが現状のようである。また、リスニングに関  
してもリーディングと同様の阻害因子としての日本  
語の介在の問題がある。音声の場合は文字と違い次  
々と伝達情報が現れては消えてゆく媒体であるから、  
前に戻って訳すという作業はリーディングと違っ  
て不可能であり、ひとたび未知の単語や把握でき  
ない音声に出会うと変換作業がその時点で中断し  
てしまい、その後混乱が生じる。また、音韻論的に  
子音の消失や子音と母音の連結（リエゾン）ある  
いは短縮形は日本語においては稀であるので、例  
えば、will not が won't という短縮形になると  
want と認識してしまう傾向が多くの子生にある。  
このような問題は英語の音声を逐次日本語に変換  
してしまうことと関係があるが、母語である日本  
語が英語の理解の阻害因子になったままの状態を  
改めなければ、リーディングやリスニングの能力  
の向上は望めないであろう。この問題を解決す  
る方法は後に述べることにする。

ライティングとスピーキングに関しても、阻害  
因子としての日本語の介在の問題がリーディング  
やリスニングの場合同様当てはまる。つまり、文  
字や音声の情報を英語に単語単位で変換し、奇  
妙な表現ができてしまうことが多々ある。しか  
し、このことよりもさらに深刻な問題は、日本  
語での発想法と英語での発想法の違いが十分理  
解されていないことに起因する問題である。例  
えば、2013 年の BBC の調査によると、フランス  
が世界に良い影響を与えているか悪い影響を  
与えているかの問いに対して、日本人の答えで  
圧倒的に多かった答えが図 1 に示したように「  
分からない」あるいは「どちらでもない」等であ  
った。<sup>5)</sup>

図 1 が示していることは、他国と比較して、  
日本人の二元論回避の志向性が突出しているとい  
うことである。これはいわゆる白黒をつけたがら  
ない日本人の心的傾向であり、フランスは日本人と

Views of France's Influence  
By Country, 2013

The white space in this chart represents "Depends," "Neither/neutral," and "DK/NA."  
Asked of half of sample

図 1

てそれほど認知度が低い国ではないはずであるが、全体の6割強の日本人がフランスという国が良い国か悪い国かという判断を保留している。英作文やオーラルプレゼンテーションを指導して日常筆者が感じることは、英語で自分の考えを伝える場合に、日本人の学生はしばしば論理矛盾を含む表現を使用するということである。"I don't have any hobbies, but I like playing tennis and watching movies."と真顔で学生から自己紹介されても、趣味がないのなら、テニスや映画が好きとは言えないはずだと筆者は思ってしまう。このような非論理的曖昧性は、英語によるコミュニケーションのルールに対する無知あるいは無神経さの問題であって、スピーキングやライティングに関わる学力以前の問題である。論理的整合性を保つために、理由付けをし、例示し、曖昧性を極力排除するのが英語のコミュニケーションの原則であり、この原則を犯せばコミュニケーションは成立し難い。例えば、TOEICと同じくETSが運営母体となっているTOEFLのスピー

キングの問題で、「都会の生活と田舎の生活はどちらが好ましいですか？」という問いがあったと仮定すると、この類の設定に対する答えはまずどちらかを選択して、その上で理由付けをするのが定石である。「田舎のほうが好ましいと思う。なぜなら、田舎には都会にないおいしい空気と水があるから。」と答えるのが定石であるが、日本語のモードで考えた場合、必ずしもこのようなパターンの答えにならない。英語の場合は、常にpro and conが問われるし、賛成側か反対側のいずれかに立ってその理由を述べて論理を競うディベートは英語圏では学校教育の中に完全に組み込まれている。二つの異なる要素をぶつけて新しい要素を導き出す弁証法的思考法が日本語モードでは英語モードに比べて難しくなる。それゆえ、英語で論理的に述べるべきスピーキングの力が日本人の場合は劣るという評価を受けると考えられる。筆者は、ここで、日本人が持つ美意識や曖昧表現の奥深さを敢えて否定しているわけではなく、こと英語によるコミュニケーションを考えた場合、発想法の転換が求められているということを指摘しているだけである。TOEFLのデータによると、TOEFL受験者の国別の比較をした場合、スピーキングのセクションで2014年は日本人のスコアが最低になっている。<sup>6)</sup>この原因を考えた場合、TOEFLが受験者のコミュニケーション能力を問う試験になっていて、日本人の場合はコミュニケーションのためのスキルが貧弱であるからと考えられる。

### 2-3 TOEIC 指導の問題点

少なくとも筆者が置かれている現行のTOEIC指導の状況下では、TOEIC®公開テストあるいはIPテストを学生が受験するためのガイダンス的授業内容で授業が展開する傾向がある。シラバスにおいてもTOEIC400点あるいは500点という具体的数値目標を明記する必要があるので、TOEICの4種類のリスニング問題形式と3種類のリーディング問題形式による内容の説明と解答法の解説が主流になりがちで、ライティングやスピーキングに結びつかない。国際化の名のもとにますます「使える英語」が求められる中、実際、TOEICの設定は速く読みネイティブの音声のスピードに付いてゆける能力を養うための工夫が凝らされている。当然、学生の中にはTOEICを何回も受験して、自身のスコアが伸びるたびにそれが励みとなり、さらに学習を進め、より速く英文を読めるようになり、より正確に音声を聞き取れるようになる者も出てくる。

彼らに共通していることは、自分の英語のレベルをスコアによつて的確に把握した上で、さらに高いレベルを目指す向上心を有することである。TOEICのスコアは具体的に目に見える目標設定を可能にし、自分に何ができ、そして何がこれからできるようになるべきなのかを戦略的に追求することを後押ししてくれる。それはある種技能の段階的習得であり、飛び箱が何段跳べるようになったとか、逆上がりができるようになったとかと同じレベルであり、今までやれなかったことをやれるようになったという達成感を与えてくれるものである。運動競技において、トレーニングをしていて、目標がはっきりしていることがモチベーションを確保できる前提条件であるように、TOEICの場合もモチベーションが上がる仕組みが用意されているのである。しかしながら、現行のTOEIC®公開テストやIPテストでは、スピーキングとライティングの分野での学力伸長に、尺度の不在のために、このTOEICの特性を活かすことができない。リスニングとリーディングの学習をスピーキングとライティングにおける表現力の向上に何らかの形でつなげなければならない。さもなければ、TOEICで900点台のスコアを持っているのに、話せない書けないという人が多く存在する現状を変えることはできないであろう。現行のTOEIC指導をスピーキングとライティングの向上のために利用する工夫をしなければならぬと思う。

TOEICは不定期に問題形式に改変が行われ、2006年の第122回公開テストからはセンテンスの中の間違ひを選ぶ誤文訂正問題が廃止され、併せてリスニングのセクションにおいて、従来のアメリカのアクセントにイギリス、カナダおよびオーストラリアのアクセントが加わるようになったし、2016年の第210回公開テストからはリスニングセクションの男女二人の会話に三名による会話の問題が加わり、リーディングセクションでは今や我々の通信手段の主流になってしまったテキストメッセージやインスタントメッセージ等のネット関連の内容を使った設問が追加される。今後もさらに改良が行われるであろうし、さらに正確な学力判定と願わくばより安価な試験の実施が可能になるかもしれない。TOEFLの場合は、以前の実施方法と現在では相当様変わりしていて、今では受験者はコンピュータの前で解答することが求められている。TOEICはTOEFLと同じくETSが開発作成を行っているわけであるから、今後この試験の実施方法も大幅に変わるかもしれない。筆者としてはTOEIC®

公開テストとTOEIC® SW公開テストの統合、併せてIPテストも同様の措置を望むが、SWの分野ではコンピュータのプログラムと受験者が直接会話をしてプロフィシエンシーを判定したり、受験者が入力してデジタル化した英作文を語彙やシンタックスの側面から評価するプログラムが生み出されるかもしれない。いずれにせよ、TOEIC®公開テストとTOEIC® SW公開テストが別々に実施されている現状に対して筆者が不満を抱いていることだけはここに表明しておきたい。

以下述べることは蛇足の感をぬぐえないと思われるが、TOEICは民間団体が運営実施している検定試験であり、文部科学省の管轄外の事業にもかかわらず、昨今TOEICの活用が文科省によって大学入試の判定レベルにまで推奨されている現状を踏まえて、TOEICの試験実施が日本でこれからも厳格公正に行われることを願う者の一人として、次の事柄をTOEIC指導の問題点の一つとして敢えて挙げておきたい。なぜなら、TOEIC指導を行う者はTOEICの試験実施の責任者になる場合があるからである。TOEICは運営と実施がそれぞれ異なる団体により行われている英語検定試験である。TOEICの開発作成および評価はアメリカの非営利テスト開発機関ETSが行っている。ETSはTOEICのみならずTOEFLやSAT(アメリカの大学進学者向けの共通試験で、日本のセンター試験に相当する)などの世界有数の規模の試験の開発作成も手掛けているNPOである。しかしながら、TOEICの実施に関しては、ETSが直接行っているわけではなく、日本では一般財団法人の国際ビジネスコミュニケーション協会が、また、日本と同じくTOEICの受験者数が突出して多い韓国ではYBM Sisa.com, Incという民間の会社が行っている。TOEICが運営母体と実施団体が異なる英語検定試験であるという事実は時として問題を発生させる。2014年2月にロンドンでTOEICの不正受験が行われている実態がBBCテレビのドキュメンタリー番組Panoramaで報道された。これは、イギリスのカレッジへの受け入れ機関が学生ビザの申請に必要な英語の運用能力の証明を行う手段としてアジア系の申請者にTOEICを利用させ、替え玉受験や試験官による解答の読み上げなどの便宜を図るという不正が行われたというスキャンダルである。ETSに落ち度はないものの、しかも不正が行われていると報道されたのはTOEICにおいてでありTOEFLは関係ないにもかかわらず、同じくETSが運営母体であるという理由で、TOEICとTOEFLの両方が学生ビザの

申請にはイギリスでは利用することが暫定的にできなくなった。<sup>7)</sup>

### 3. あるべき英語教育

#### 3-1 日本の英語教育の問題点

日本の英語教育の問題点として第一に指摘しておくべきと筆者が思うことは、既に述べてきたようなリーディングとリスニングの偏重の問題である。そして、この問題が TOEIC 指導に顕著に表れていることはすでに示したところである。この問題から派生する具体的課題を挙げるとするならば、TOEIC で高いスコアを持っているのに英語が話せない書けない、つまり「聞く・読む・話す・書く」の4技能のアンバランスを有する学生を現状のように大量に作り出さないためにはどうしたらいいのかということがある。現下の大学入試制度では、大学入試センター試験の英語の問題は高校生レベルの英語のリーディングとリスニングに関する受験生の能力を効率的に測るための工夫が施された内容ではあるが、スピーキングとライティングの能力を測る問題が基本的には含まれていないと言える。現在、大学入試センター試験は高校在学中の学習到達度テストへの移行を迎える過渡期にあるので、今後の推移に伴って教育現場の英語指導の内容がどのように変化してゆくのかを注視しておくべきである。さらに、日本の修士・博士課程の大学院入試の英語の問題の主流は未だに英文和訳である。これは大学院入学後に論文の作成のために英文の原書を読む必要があるためであり、入学後大学院生に求められる基本的な技能であろうが、英語の論文を執筆する場合は当然ライティングの能力が必要となり、国際的な学会で発表する場合はスピーキングのプロフィシエンシーが求められる。大学院の入試に英文和訳のみを課した場合、それは英語の論文執筆や国際学会での発表などの研究活動はその教育機関では想定していないという表明になりかねない。大学入試センター試験や大学院入試の英語の問題に関しては、受験者の「聞く・読む・話す・書く」の4技能が互いに相関関係を持っているという前提で英語の限定的技能を測るための試験が実施されているのであろうが、筆者は経験的にこの種の問題を甚だ疑問視する。英文をスラスラ読む学生も簡単なセンテンスが聞き取れない事例を筆者は数多く見てきたし、反対に会話能力に長けた非英語圏の外国人が英語の文章を読むのに苦労する姿を見てきたからである。

日本の英語教育の第二の問題として、大学の英語の授業に限って言うと、学生にとって受け身の授業になりやすいことが挙げられる。対面式の授業を行うことができる少数の受講者のクラスであれば双方向のコミュニケーションをとりながら大学の授業を運営できるであろうが、例えば筆者の英語の授業は中学校や高等学校の一クラスの人数と同程度の40人前後である。本来英語の授業は講義形式ではなく演習形式の授業であり、学生に音読を指示したり問題の答えを学生に求めたりして理解度を確かめるのであるが、授業内容を学生に理解してもらおうと思えば思うほど説明に割く時間が長くなる。当然、その分だけ一人の学生が一コマの英語の授業の中で自ら発言する機会を与えられる頻度はますます少なくなってゆく。コミュニケーション能力を育成する語学の授業において、このような悪循環に陥ることは極力避けなければならないと思う。

第三の問題として、英語運用における応用力や創造力の不足を挙げておきたい。日本の学生は学習した内容を機械的に問う問題にはそつなく答えるが、ちょっと捻った応用問題を解くのは苦手なようである。また、独創的な面白いアイデアを提供してくれる学生が稀である。毎年英語で自己紹介してもらおうプレゼンテーションの内容をチェックして痛感することだが、日本人学生に比べて外国人留学生の方が聞いていて圧倒的に面白い。外国人の発表には異文化の要素が含まれているので面白く感じるということもあるだろうが、自分をアピールするために自分自身で考えた独自の工夫があることも確かである。応用力や創造力は知識の組み合わせ方によるものである。既に獲得済みの知識のある断片と別の断片をどのように結び付けるかで発見がなされ新たなものが生み出される。この作用を妨げる一番の要因は、詰め込み型の暗記学習だと思う。語学は暗記であると捉えている学生が多いと思われるが、知識はインプットよりもアウトプットの仕方がより重要であることを認識すべきである。応用力や創造力の不足への対応策は次に述べることとする。

#### 3-2 対応策

第一の問題であるリーディングとリスニングの偏重の問題への対応策は、「聞く・読む・話す・書く」の4技能をできるだけ互いにリンクさせることであろう。実行すべき具体的優先事項としては、英語を逐次和訳することに専念することから抜け出せない学生の傾向を極力排除すべきことが挙げられる。英語学習は、和訳をすればその瞬間に英語ではなく

日本語の知的作業に変貌してしまう。この方法では学習対象である英語そのもののパターンが身につかない。英語のパターンを脳に定着させるためには英語の音声を徹底的に重視することが必要となり、具体的にはダイレクトメソッドの導入が最も効果的な対応策であろう。授業の中で教師が英語で説明や質問をし、学生には英語で答えさせることを徹底する。英語の音で学生の頭を満たし、音声を脳裏に刻むことが重要になる。人間は頭の中で言語を音声化して考えるのであって文字を思い浮かべて考えを巡らす者はいない。特に TOEIC 指導においては、リスニングとリーディングの学習に限定せずに、これらの技能をスピーキングやライティングにリンクさせる目論見の下に、リスニングのパートではリピートとディクテーションに多くの時間を割く。特に TOEIC のパート I の指導では、各設問の四つのセンテンスを各々何回も学生に発話させ書かせる。同様に、リーディングのセクションにおいても音声重視を徹底させ、英語音声を発話する音読に時間をできるだけ費やす。

第二の問題としての受け身の授業を回避するための対策としては、能動的学修つまりアクティブラーニングを授業に積極的に取り入れるべきであろう。アクティブラーニングはペアワークやグループワークなどの協同学習として捉えられる傾向があるが、これは教師から学生へ方向に知識を伝達する講義形式の授業に対するアンチテーゼとしての概念である。学生が受動型から能動型への転換を学ぶ姿勢において示せば、それはアクティブラーニングの授業と言えるだろう。大学の英語の授業においては、学生が発信型の英語を使う場を提供することが重要になるし、それが出来るか否かは学生が興味を示すような課題を提示できるかどうかにかかってくる。興味という点では、オンラインで外国人と英語のコミュニケーションを図ることも面白い試みである。実際、授業の中でスカイプを使ってフィリピンのチューターと英会話を行っている中学・高校あるいは大学もある。異文化への興味を持つ生徒や学生は特に、このような機会を使って自分のことを積極的に相手に伝えようとするし、彼らは発信型コミュニケーションつまり自分の意見を相手に伝えることを目的としたコミュニケーションの能力を身に付けるであろう。TOEIC の授業においては、アクティブラーニングで最も汎用性があると言われている Think-Pair-Share を使うことが望ましい。<sup>8)</sup> 具体的には、例えば、TOEIC のリスニングの応答問題パート 2 において、"You can't see much

of Paris in just two days, can you?" という付加疑問文と "But two days are all we have." という答えがあったとして、まず、この付加疑問文を変形させて新しい内容の問いを学生各自に考えてもらう。<sup>9)</sup> 次に、ペアを組ませて相手にその問いを投げかけさせ、相手はそれに英語で答える。これを交互に行う。最後に、いくつかのペアに自分たちの応答をクラス全体に提示してもらう。このような方式で、TOEIC の授業も受動型から能動型への転換が可能であろう。

第三の問題である英語運用における応用力や創造力の不足を解消するには、英語のパターンをまず習得させ、それを何回も使わせることが重要であろう。パターン習得と試行錯誤の練習の反復が、発見と革新を生むのである。応用力や創造力は知識の組み合わせ方の問題であることはすでに説いたが、試行錯誤によって経験的に新しく面白い組み合わせが見つかり、それを実際に自分で運用できるようになる。語学については特に「習うより慣れよ」と言われるが、英語を習うのではなく自分自身で実際に使ってみることが大切である。この意味で、英語の早期教育は重要になってくると思う。なぜなら、言語への慣れは時間量と相関関係があるということと、言語に対する子供の適応能力をもっと利用すべきと考えるからである。英語学習のために日本語の習得が阻害されるという意見があるが、日本語の阻害の問題は英語教育の問題ではなく国語教育の問題であろう。国語の授業時間数が減るのならそれは問題であるが、例えば小学校 3 年生の国語の時間数を減らさないで英語の授業を加えることはできるはずだ。ともあれ、大学の TOEIC 指導においては、応用力と創造力のための経験値を上げるために、場数を踏ませることが大切である。

#### 4. 結論

英語検定試験 TOEIC は大学生の英語運用能力を向上させるための大変便利で有効な手段であることを説きつつ、大学における現行の TOEIC 指導を有効に行うには TOEIC 受験の制度化が不可欠であることを指摘した。そのうえで、TOEIC 指導に当たっては、説明型から発信型つまり学生が発話し自らの意見を述べる姿勢を促す学修にかじを取りなおし、スピーキングやライティングとリンクする形でリスニングやリーディングの指導に当たるべきことを提言した。「聞く・読む・話す・書く」の 4 技能がどのように相互にリンクし得るのかを考えることは、TOEIC 指導に限らず TOEIC に関連しな

い他の英語科目にも当てはまることだと思う。大学の TOEIC の授業に英作文の直接指導やディベートあるいはオーラルプレゼンテーションにまで拡大的に敢えて踏み込んでそれらを導入する必要はないかもしれない。そのような学習は本来は他の英語科目で行えばいいことである。要は、TOEIC の授業をリスニングとリーディングの学習に限定しないでスピーキングやライティングにつなげる努力をすることである。4 技能をリンクさせながら学習の発信型化を学生に促すための具体的な方法論は個々の教員の指導上の工夫にゆだねられる問題であろうが、筆者自身は、少なくとも TOEIC 指導に関してはこの小論で述べてきた方針で授業の組み立てを行うことが肝要と考える。

#### 注

- 1) 内海俊祐著「日本の大学における TOEIC 指導の課題 その I」26 頁 (『宇部フロンティア大学人間社会学部紀要』, Vol.5 No.1、2015 年)
- 2) 国際ビジネスコミュニケーション協会 「2014 年度 TOEIC テスト受験者数は過去最高を更新」  
<http://www.toEIC.or.jp/press/2015/p038.html> (2016 年 1 月 21 日)
- 3) 文部科学省 「高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編」[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2010/01/29/1282000\\_9.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2010/01/29/1282000_9.pdf) (2016 年 2 月 2 日)
- 4) パベルプレス「翻訳出版オンラインワークショップ」<http://babelpress.co.jp/html/page31.html> (2016 年 2 月 12 日)
- 5) WorldPublicOpinion.org "2013 Country Rating Poll"  
<http://www.worldpublicopinion.org/pipa/2013%20Country%20Rating%20Poll.pdf>(2015 年 12 月 2 日)
- 6) EST "TOEFL<sup>®</sup> Test and Score Data Summary" (2016 年 1 月 11 日) [https://www.ets.org/s/toefl/pdf/94227\\_unlweb.pdf](https://www.ets.org/s/toefl/pdf/94227_unlweb.pdf)
- 7) BBC "Student visa system fraud exposed in BBC investigation" <http://www.bbc.com/news/uk-26024375> (2015 年 3 月 12 日)
- 8) 山本崇雄著『はじめてのアクティブ・ラーニング! 英語授業』36 頁 (学陽書房、2015 年)
- 9) ジム・クヌーセン、三原京著『TOEIC test:to the point—新 TOEIC テストポイント攻略』51 頁 (南雲堂、2007 年)